報　　告

「これからどう生きるか」
－ 中学校生徒に対する講演の反応 －

北陸メンタルヘルス研究所　草　野　　亮

はじめに

筆者は精神科医である。北陸３県の富山・石川・福井の各公立病院に長い期間勤務してきた経験をもつ。定年を期にはじめて学校の世界に入った。５年前より３カ所の中学校のスクールカウンセラーの経験をしている。２カ所は富山市中心部で，１カ所はその近郊農村部の中学校である。

中学生らは，「なぜ勉強をするのかわからない」，「中学校の勉強は社会に出ても役に立たない」，「学校の授業が面白くない」などという。そうであれば，不登校をしたり，ストレスがたまれば非行を起こす可能性がある。彼らのいい分を聞けば彼らの行動も当然であると考えられる部分もある。しかし，一般の生徒たちにも，程度の差こそあれ，同様なことをいうことが多いのに私は驚いた。彼らにははっきりとした未来の目標がないようだ。それは大人たちの責任だと思う。なにか生きる示唆を彼らに与えることができないかと思う。富山市近郊の和合中学校の１年生から３年生までの全校生徒380人に対して，「これからどう生きるか」のテーマで講演をした。その際に得られた生徒の感想を中心に報告したい。

地域特性

和合中学校校区には，八幡，倉垣，四方，草島の４小学校が存在する。富山市北西部の神通川河口の左岸に位置し，神通川を挟んで対岸に岩瀬地区の工業地域を望む。

戦後の「町村合併促進法」制定に伴い，和合中学校の学区であったことから，当時の婦負郡四方町，八幡村，倉垣村などが合併し，繁栄と和合を希望して和合町と名付けられた。1960年に富山市に編入され，和合町の名が消えた。

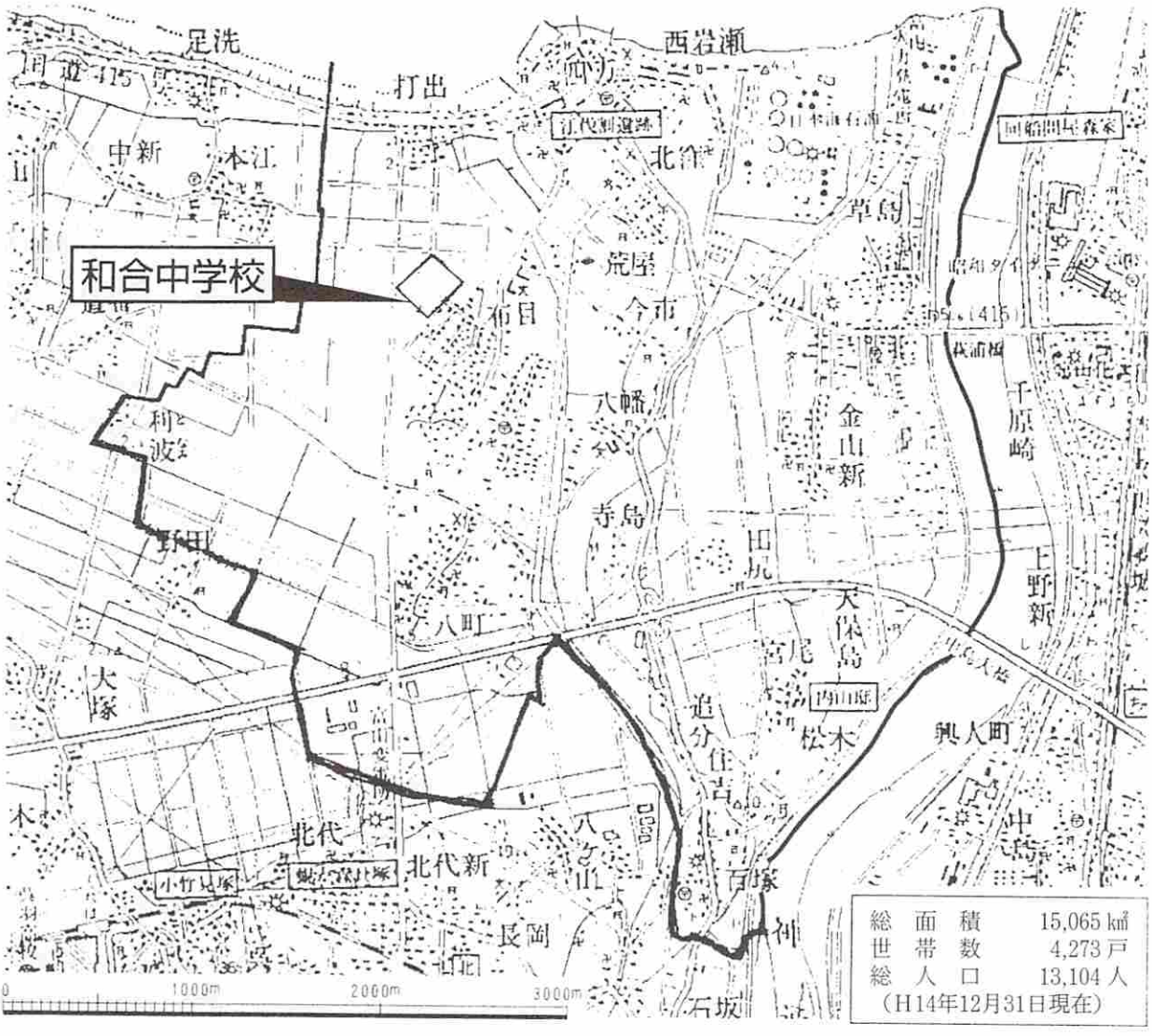
この地域は広い平野が広がり，農村地帯としての旧い伝統と誇りが残っている。八幡村は，古代より婦負郡八幡村といわれ，その地名は大幡主命の北陸鎮撫の功を慕い祀られた八幡宮があり，戦法が八幡（幟）を押し立てて進んだことにちなんでいる。牛カ首用水灌漑によりいまも美田地帯である。倉垣村も，平野地で，平安時代から室町時代にわたって倉垣庄の名で記録されている。最初，皇室領や社寺領であったが，のちに庄園や十村制となった。四方町は，沿岸漁業を営む農漁村であったが，沿岸漁業不振に代わるべく，昭和初期頃から家庭薬配置業が増加した。現在，富山市中心部への通勤者の多いベッドタウン的存在を呈している。草島村も，かつては農村地帯であったが，東岩瀬港改築や日本海ドック社宅にかなりの農地を提供したり，北陸電力火力発電所など企業の進出などで，農村地帯から，住宅地や一部工業地帯へと変化しつつある。

講演の要旨

１．いま不景気で，大人の世界では失業やリストラなど先が見えない状態である。

２．日本は過去に，もっとひどい状態があった。第二次世界大戦の敗戦直後，わが国は廃墟と化した。生きるための衣食住すべてが失われたが，日本は立ち直り，経済成長が達成されていまのような豊かな社会となった。

校区地図



3．日本は資源がない国である。立ち直ることができたのは，みんながこつこつと働いたこと「勤勉」である。当時の大人たちは，子どもにこのような苦しみを与えまいと一生懸命に働いた。自分のためよりも子どものために歯をくいしばって働いた。当時，子どもであった私はこの目で大人たちの真剣な働きぶりを見て来た。

4．日本の敗戦の時，私は韓国のソウルにいた。中学１年であったが，その日から学校は閉鎖となった。引き揚げ後に，呉西のＴ中学校（旧制）１年に編入したが，授業内容は全然わからず，つらかった。いつまでもわからないだろうという不安にさいなまれた。どうせ落第だと思い，不登校がちであった。しかし，お情けで２年に進級してしまったので，一層困った。授業がわからない苦しみや，ビリの気持ち（劣等感）を体験したことは，私にとって今よかったと思う。

5．隣の席の人がビリの私に「教えてくれ」と聞きに来たのでびっくりしたが，習ったばかりのことで教えてあげた。それを見て，また別の人が聞きに来た。人に教えるということは，自分もよくわかるようになり，成績もあがった。（他人にしてあげたことはいつか自分に戻って来る。情けは人のためならず）

6．試験の山が当たったり，問題を正答すると喜ぶのは普通。しかし，山がはずれたり，間違った答えをしたりした時に，私はうれしかった。それは，山がはずれるとさらに余計に覚えることができるし，間違った答えを訂正しておぼえることができるから・・・。私は，その時のよ

い点数よりも実力をつけることが大事であると思った。本番は何かを考える。それは高校（大学）の入学試験であるかも知れないし，人生そのものかも知れない。

7．誰にも「取り得」が必ずある。くよくよするな。学校の勉強ができなければ，スポーツをやればよい。スポーツが下手なら文化部関係や好きなこと（趣味）でもなにかやればよい。

8．学校の勉強の仕方を教えよう。授業中にあまり聞かないで，家に帰って復習しょうとすると時間の無駄である。授業中に真剣に聞いてその場で覚えること。そのためには，前もって教科書を短時間にサーッと斜めに読んでおく。また，ノートには要点（単語）だけ書いておけば，試験勉強は単語の連想で全体を思い出し，短時間で済む。また，試験が済んでも忘れることがなく，実力となる。次の試験の時は，新しく習ったことだけを覚えればよいので少なくて楽である。私はそのような方法で，ビリだった番数が試験をする度にどんどんあがって行った。

9．余った時間は，自分の好きなことをやる。読書でもスポーツでも，なんでも将来役に立つものだ。学校でビリの私がエスペラント語（万国共通語）をやったことが非常に役に立った。余計なことをやると無駄のようにみえるが，後で英語やドイツ語やフランス語の勉強の時，有利でおつりが来た。オランダの少女とずっと文通し，楽しく，世界の知識も広がった。

10. 英語の先生からジュラルミン（廃物飛行機の金属）の下敷きで頭を叩かれ，血が出た。叩かれた理由がわからず，腹が立ってしようがなかった。先生を見返してやろうと思って，英語を一生懸命に勉強した。おかげで大学に合格した。いまは恨みでなく感謝している。苦しみがかえって良いことを生み出す。（禍転じて福となす）

11. 田中耕一さんはノーベル化学賞をもらった。こつこつとやったため。大学では電気の勉強をしたが，畠違いの化学の分野で大発見をしノーベル賞につながった。中学の勉強が役に立たないという人がいるが，それは違う。知識はものごとを覚えるだけであるが，知恵とは学んだことを応用する力である。学校はその知恵を学ぶ所である。

12. 大人になると社会に出る。社会で一人では生きていけない。人間とは人と人との間で生きていくことである。学校は集団生活の大事な基礎訓練である。不登校は社会で生活する基礎訓練ができないので，損をする。不登校者には手をさしのべて欲しい。私は悩んでいる患者さんに手をさしのべる仕事をして来た経験からいう。

13. 脳は，生まれた時よりどんどん発育し20歳頃に最大の重量になる。それ以後は脳の重量は漸減していく。脳には，動物脳（本能）と人間脳（理性）とがある。自分だけのことしか考えないのはトラやライオンのような動物だ。イジメは動物脳の働きだ。人間には他人の気持ちがわかるようになる。自分を理性でコントロールすることができる。人間はそれぞれ社会に必要とされるようになることが大事であると思う。人のためにやることは，いつのまにか自分に返ってくることにもなる。また，自分のことだけ考えていると一喜一憂し，心が不安定となる。人のためと思うと心が安定する。生きがいを感じる。（これはスライドを用いて視聴覚的に説明した）

14. 苦しみは誰にでもある。どんなに苦しいことがあっても，それは必ず通り過ぎるものである。（冬来たりなば春遠からじ）　苦しみは人間をひとまわり大きくするので，ありがたいものである。つらいことがあっても自殺だけはするな。自分の命は自分のものではない。両親のDNAを受け継いでいるということは両親の身体の一部でもある。両親はまたずっと先祖につながっている。命は天からの授かりものだ。自殺は父母はじめ周囲への迷惑のみ。死んだらそれで終わり，敗北である。生きていれば何とかなる，いつか花も咲き，実も実る。

最後に，目をつむって，母（あるいは母親代わり）に対して，小学校１年生の１年間に自分が

「してもらったこと」「して返したこと」「迷惑をかけたこと」の3点を調べてもらった。「してもらったこと」が多いが，「して返したこと」は少なく，「迷惑をかけたこと」はさらに多いということを体験してもらった。その他の周囲の人々，例えば父親や先生や友だちにたいしてもそのようであると説明し，周囲への感謝の気持ちが大事であると結んだ。これは「内観」の手法であるが，その用語は用いなかった。

生徒の感想から

「これからどう生きるかということを真剣に考えたことはなく，ただ1日が楽しくなることだけを考えていた私にとって，今日のK先生の話はよかったと思います」（3年女子）

「私もこれから，どうやって生きていけばいいかわかりません。しかし，今日，K先生のお話を聞いて，少しだけど何かわかった気がします。「自分のため」ではなく「人のため」に生きること。すごく大切なことだと思います。自分のためにばかり生きていたら，人のことはおろそかになります。本当の友だちは絶対にできないですし，イジメにだってあうと思います。それに，人のために生きることは自分のために生きることでもないでしょうか。なぜなら，そうすればみんなから好かれる人間になれると思うからです。（3年女子）

「K先生が中学生の頃，戦争が終わり，日本には何もなくて，これからどうするのかと人々が希望を失っていて，とても苦しい生活をしていたことがよくわかります。けれど，苦しい中，希望もない中で，少しでもよくなるようにこつこつと働いていた当時の人はすばらしいと思いました。何もなかった日本が，現在のような発展した国になっているので，苦しいことに立ちむかい，一生懸命やることによって，未来につながることがわかりました。今，希望を失って不登校や自殺してしまう人がいるけれど，少しでも苦しいことに立ちむかう勇気をもっているといいと思える人生を歩んでゆけると思いました」（2年女子）

「今日の話で，一番印象に残っていることは『苦しみは人間をひとまわり大きくする』ということです。よく『もうイヤだ』とか『もうやめたい』と思うことがあるけど，結局は，最後までやりとげていることがあります。最後までやりとげることによって，何かを得ることができます。そして，得たものがつみかさなって大きな何かに成長することができるのだと思います。でも，苦しみから逃げてしまうと得るものが何もないと思います」（3年女子）

「私はいつでも役に立たないからやらない・・・といってしまうクセがあります。お話しを聞いて，世の中にムダなことはないのだなということがわかりました。中学生の現在でいらないと思うことでも，きっとそのうちに役に立つのだろうなと思いました。先生の話を聞いて，多少勉強がわからなくても，学校は知識の勉強ではなく，知識の使い方を学ぶためにきていると思いました。これからはたくさんの知識をたくわえつつ，知識の使い方も学校生活で身につけていきたいと思います」（2年男子）

「今日の話を聞いていると，自分の考えをあらためなければならないことがたくさん出てきたような気がします。何をしても自分はダメだというような考えは決してもたないようにといっておられました。スポーツがダメなら，ほかに自分のできることがないかを考え，勉強でも自分の好きな科目に打ち込めば自信がつき楽しくなるといっておられました。自分はくよくよする方ですが，新しい自分を探して歩き出さなければならないことを教わったような気がしました」（3年男子）

「K先生は，わたしたちが非行など間違った道を歩まないように，自分が昔どんな生徒だったのかを話してくださいました。勉強がわからなくて，

学校がおもしろくなくて不登校になってしまったことを聞いて，とても驚きました。過去に苦しさを味わった人は，そのことをバネにできるのだと思いました。人の役に立てることをするということは，すばらしい人生をおくるということというK先生の言葉に感動しました」（2年女子）

「不登校は損だというお話しを聞いたときは，学校生活の中で，どんなつらいことがあっても，不登校だけは絶対しないでおこうと思ったし，脳は20歳ごろに完成するから勉強をするのに今が一番チャンスと聞いて，今一生懸命に勉強をしようと思いました」（1年女子）

「私は昔，いじめで，かぜをひいていない時でも，不登校していたときもあったけど，いつまでも不登校していたらひきこもりになって，社会の中で生きていけなくなると思いました」（1年女子）

「家族の信頼や大切さなどを感じることができました。今の時代は子供が親を殺し，親が子供を殺しています。殺しあう家族など，家族なんかじゃないと思います。親にしてもらったことを思い出しなさいといわれた時，多くのことが頭に浮かびました。でも私が親にやったことなどぜんぜん思い出せませんでした。私の両親は病気でつらい体で私たちを育ててくれています。感謝しなければいけないと思いました」（3年女子）

その他にも参考になる感想を下に箇条書きに記してみる。

手品をするとは思わなかった。面白かった。
K先生の子どもの頃の話が役に立った。
授業中にしっかり勉強して，余った時間を好きなことをすることがわかった。K先生のいわれた勉強の仕方をやってみようと思う。
どんなことでも役に立つことがわかった。時間を有効に使うということがわかった。
知識と知恵の違いがわかった。
不登校はやってもいいけど最後には自分が損すると思った。学校に不登校がちの友だちの話を聞いて，来るようにいってあげたい。
勤勉ー私には当てはまらない言葉だと思った。私は毎日コツコツということが苦手です。どうしても怠けてしまう。先生の話を聞いて勤勉というのは大きな力をもつことがわかった。
苦しいことはありがたいことだということを聞いてその意味がわかった。
自分にダメなところがあって，それをくよくよして，ずっと引きずっていたが，新しい自分を探して歩き出さなければならないことを教わった。
人の役に立つということはいままで考えたことがなかった。先生の「人のために生きる」という考えに心うたれた。
話を聞いているだけなのに，自分に伝わってきたので，このような熱く語ってくれるような先生は，これからの現代社会に大切な人である。
ボク達の考え方を何か変わらせてくれるような人であると思った。
自分も死にたいと思った時や学校に行きたくないと思った時がよくあります。自殺した人は損だと思った。
最後のお母さんの話がとても印象的でした。母にしてもらったことは多いが，して返したことはない。お母さんをよろこばせてあげたい。
みんなに感謝の気持ちをもちたいと思う。
K先生は私たちに明るくすてきな未来を期待しているんだなあと思った。

まとめ

平成14年12月のかなり気温の下がった日であった。暖房のきかない体育館で，生徒たちはオーバーをはおり，寒さに震えながら聞いた。私自身も寒いので，最初にみんなといっしょに体操をした。その体験は苦しみである。それを辛抱しながら，最後まで静かに聞いてくれたことは，筆者の大き

な驚きであった。講演内容に沿うような環境条件であったと思う。生徒の気持ちをやわらげるために手品を披露した。「人を喜ばせるために，定年後に手品を習った」と説明したが，それも講演内容の一部であった。

筆者のスクールカウンセラーとしてのこれまでの経験では，富山市中心部の２中学校に比して，近郊農村地域の中学生は純朴で，教師や筆者らの指導にも素直であると感じられる。古来からの農村文化的風土の影響は，現代の中学生の心にもなお息づいて残っており，良い影響を与えているように思われる。

全生徒の感想文を読ませてもらったが，私の伝えたい内容を90パーセント近くの生徒たちが正確に理解してくれていると感じた。生徒たちの心にひびいてくれたという感触がありうれしい。

次の時代を担う彼らが健全に発育し，将来の人生を自分で切り拓きながら歩いて行くことを念じている。